

テレビアニメーションにおける家族表象の変遷

The Changes of Family Representation in TV Animation

市野 真緒
指導教員 田尻 真理子

東京純心大学 現代文科学部 こども文化学科 田尻ゼミ

アニメーション作品には、作品ごとに家族や性別の描かれ方に特徴がある。その中で、時代に合わせたジェンダー的意識や扱い方に関する変化を取り入れている作品も多い。本論では、特に家族表象に着目することで、「家族」という存在がどのように変化しているか、時代をどのように反映しているかを論じる。

家族表象, テレビアニメーション, ジェンダー, 子どものジェンダー観, 時代背景

本発表では、「テレビアニメーションにおける家族表象の変遷」について取り扱う。

研究背景

近年のアニメーション作品では、「男性は仕事、女性は家庭」という固定的な性別役割分業観からの脱却を意図的に描いている作品が目立つように思われる。また、両親や家族の描かれ方が特徴的な作品が多く、アニメーション作品における家族の描かれ方について関心を持った。

本論では、特に家族表象に着目することで、「家族」という存在がどのように変化しているか、時代をどのように反映しているかを論じる。

「家族表象」とは

「家族表象」とは「家族」に対する意識やイメージ、さらにその描写を指すといえる。アニメーション作品における「家族表象」、すなわち家族の描かれ方とその変遷を研究テーマとして取り扱いたい。

研究目的

まず、時代とアニメーションの関係について考察する。

日本では1963年1月に「鉄腕アトム」の放送が始まって以来、今日まで多様なアニメーション作品が作り出され、放映されてきた。非常に長期にわたっての放映、人気の継続が見られる。

アニメーション作品で描かれる世界観やキャラクターには、時代背景や流行が反映されやすい。アニメーション作品に着目することで、時代の移り変わりを同時に見ていくことができるのではないか。

2点目は、アニメーション作品が子どもに与える影響力の強さに注目する。

藤村・伊藤の「テレビアニメが子どものジェンダー意識の形成に与える影響」によると、「子どもたちにとって最も身近で見ることが容易なメディアはテレビである」とされる。

また、NHK（日本放送協会）が1990年以降行っている「幼児視聴率調査」によると、子どもたちのテレビ視聴時間は、時代と共に増加傾向にある。また、同調査から、2歳から6歳までの子どもを対象に調査期間中によく視聴していた番組をランキング化した結果、上位10番組中9番組がテレビアニメーション番組である事が分かった。現代の日本の子どもたちにとってテレビアニメーションは、日常の娯楽として最も身近で、高い地位にあると言える。

ところで、1990年代以降になると、メディアによる性役割あるいはジェンダーに関する研究が多く行われ、複数の研究において、テレビアニメには

ジェンダー・バイアス（「男らしさ」「女らしさ」といった観念を基に男女の役割を固定的に考えること）が見られることが指摘されている。

テレビアニメーションが子どもにとって最も身近な娯楽である事、そして、メディアが持つ力には子どものジェンダー観の構成に影響を与えるということがわかっている。そのため、特にテレビアニメーションに着目して研究を行いたいと考えた。

先行研究

本研究テーマに関しては、須川によって2013年までのアニメーション作品で行われている。その結果は以下のとおりである。

研究対象作品は、ビデオリサーチ社が1972年から2012年まで、5年ごとに統計を出している視聴率ランキングの上位アニメーション作品である。ランキングを参考にしながら、1969年から2013年までの国内主要アニメーション作品における家族表象をまとめている。

アニメーション作品は、「ファミリー向け」「男児向け」「女児向け」という3つの視聴者ターゲット別、そして年代別に分けて、分類ごとの家族表象の特徴の分析や、通史的考察が行われる。

その結果、ファミリー向けアニメ作品では、家庭内役割として、父親がサラリーマン、母親が専業主婦のパターンが多い。ジェンダー的役割を採用していると言える。また、中流家庭・核家族の設定を採用したことが多い。子どもにとって現実感のある、理想化された規範的家族として描かれる。表象の変遷としては、時代による変化の影響をほとんど蒙らず、「家父長」的設定や、「理想的二世帯同居」など、「古き良き時代」の規範的家族としての表象が見られる。

次に男児向けアニメ作品では、ファミリー向けアニメ作品と異なり、父親不在の作品が多いことが特徴である。

男児向けアニメ作品では、主人公少年の冒険や成長がストーリーの主軸となるため、日常生活の描写は中心ではない。そのため、「家」「家族」が、ほとんど見られない。表象の変遷としては、父親の不在と少年の成長が強く結びついている点に変化

はない。しかし、1990年代後半以降、家事の中でも特に「料理」に男性キャラクターが深く関わる設定が増えている。

次に女児向けアニメ作品では、核家族・中上流家庭が大半である。2000年までに放送された作品では、父親が専門職や会社員、母親が専業主婦の核家族で、一軒家に居住という設定が大半であった。例外はあるものの女児向けアニメ作品では、父親が家事を行う描写が非常に少なく、家庭生活における父親の不在が特徴的である。

表象の変遷についてはファミリー向け・男児向けと異なり、時代による変化の影響を強く反映している。2000年から2010年代にかけて、両親に関する描写で、ジェンダーに敏感な、ジェンダーに配慮した(ジェンダーセンシティブ)ものが増加した。

2000年代に入ると更に変化が見られる。父親の労働が可視化され、母親の働く姿も見られるようになる。両親の労働が顕在化されていくのである。同時に、父親の家事描写も顕在化していく。

また、それと同時に、既存のステレオタイプを攪乱する主人公女児の多様化した表象の増加もみられる。このように「父親の家事の描写」が多くなり、さらにキャラクターの多様化を提示することは、子ども視聴者のリテラシーを高める上で重要となると須川は論じる。

アニメーションの分類によって、時代背景を映し出しやすいかどうかに変化が生じることも分かった。

今後の課題

2017年に発表され須川の論文は、2013年までに放送された作品を取り上げている。したがって2014年以降から現在に至るまでの、アニメ作品での家族表象の変遷を明らかにすることに本研究の意義がある。